

第3章 中等学校における言語・文字の教育

1 和漢文科の設置

明治14年（1881）7月、文部省は中学校教則大綱を出し、「和漢文」科を設けました。

これ以前、学制期においては、中学に正則・変則の二つの別がありました。中学教則の定めるところでは、正則中学のほうに「国語学」「習字」「古言学」が、国語に関する教科として設けられていたのですが、実際にどの程度まで行なわれていたのかは明らかではありません。当時は小学校を整備することのほうに力が注がれていましたし、また変則中学のほうが大部分でした。大阪英語学校（後の大阪中学校）では、明治9年（1876）に和漢学の科を設けたとありますが、その具体的な内容についてはわかりません。

明治12年（1879）の教育令では、「中学校ハ高等ナル普通学科ヲ授クル所トス」と規定しました。この「高等ナル普通学科」ということは、中学校教則大綱では、さらに次のように明らかにされました。

中学校ハ高等ノ普通学科ヲ授クル所ニシテ、中人以上ノ業務ニ就クガ為メ、又ハ高等ノ学校ニ入ルガ為メニ必須^すノ学科ヲ授クルモノトス。（第1条）

進学の二重組織，つまり一般の人々とその指導者階級の養成という組織は，ようやくこのごろから形をとりかけています。

ところで，この期の中学は，初等中学（４年）と高等中学（２年）とに分けられ，小学校中等科卒業以上の学力のある者が初等中学に進むように定められています。そして，国語に関係のある学科としては，「和漢文」科と，「習字」科とがあります。その各週の時間配当を教則大綱にかかげているところに従って示しますと，次の表のようになります。（小計のところは筆者が書き加えました。通計は全学科の週時間数です。）

学 科	初 等 中 学 科								高 等 中 学 科				各 科 授 業 時 間 計
	第 1 年		第 2 年		第 3 年		第 4 年		第 1 年		第 2 年		
	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	前期	後期	
和漢文	7	7	6	6	6	6	6	6	7	7	7	7	78
習 字	2	2	2	2									8
(小計)	9	9	8	8	6	6	6	6	7	7	7	7	86
通 計	28	28	28	28	28	28	28	28	26	26	26	26	328

この表から見ますと，国語関係の教科がだいたい全授業時間の4分の1ぐらいを占めていることがわかります。英語科の時間数と比べてみても，初等中学１年では「和漢文」科のほうが１時間多くなっています。学制期ではほとんど英語ばかりで授業していた中学もあったのですから，それに比べて，ずいぶん重視されるようになったわけです。

和漢文を重視する考えは，当時の当局者の間にかなりあったよ

うです。明治14年、参事院議官の井上毅^{こわし}から太政大臣、左右大臣
にあてた上陳書の中には、

維新以来、文部ノ唱励ハ、主トシテ小学ノ普通教育ニ^{あり}在テ、
中学以上ニ在ラズ。是レ士族ノ子弟ヲ^{かり}駆テ、福沢ノ門ニ^{ふくそう}輻湊セ
シムルノ一ノ原因タリ。^{仏国ニ於テ国家ノ補助金ハ中}今、^{よろ}宜シク国庫ヨ
リ毎年五十万円ノ補助金ヲ出シ、士族^{しゆう}団聚ノ地方ニハ、中学校
^{ならびに}并 農学職工学ヲ設ケ、而シテ中学ノ学則ハ、国文ト漢学トヲ用
ヒ、其洋務ヲ知ルハ^よ翻訳書ニ依ラシメ、^{現今ノ中学規則ハ、猶ホ英学}又
洋風ニ^{さん}模擬セル煩細ノ学則ヲ删除スベシ。

と述べられています。これは、自由民権運動への対策として述べ
られたものですが、ここでは国文と漢学を用いることが強調され
ています。当時の復古的思想、徳育主義の主張と関連して考えら
れるものです。

2 就 学 状 況

当時の就学状況は、次ページの表のとおりです。これで見ます
と、明治12年（1879）は別として、1万人から、1万5千人ぐら
いのものです。明治12年は、私立学校へ通っている生徒が多いの
ですが、13、14年と激減しています。上に見た井上毅の上陳書にも
述べられていたような、自由民権運動と政府のそれへの対策とい
うことと、あるいは関係があるのかもしれませんが。

そして、そのほか女子の数のきわめて少ないことにも気がつき

中 学 校 ・

			明 治 12 年	明 治 13 年	明 治 14 年		
中 学 校	官 立	男 女 計		— — —	70 — 70		
			公 立	男 女 計	7,478 308 7,786	8,608 302 8,910	11,010 204 11 214
					私 立	男 女 計	29,803 2,440 32,243
	計	男 女 計					37,281 2,748 40,029
			高 等 女 学 校	官 立 公 立 計			

ます。もちろん、じゅうぶんな設備もなかったのですが、まだ女子は、学問はしなくてもいいという考え方のほうが普通だったの
でしょう。以下、部分的に女子の国語教育についてふれることも
ありますが、それは、このように少ない生徒を対象にして行なわ
れていたものだということについて、まず注意しておきたいと思
います。

高等女学校

明治 15 年	明治 16 年	明治 17 年	明治 18 年
99	219	268	964
99	219	268	964
12,218 78 12,296	13,929 13,929	14,539 14,539	13,783 13,783
686 6 693	615 615	293 293	301 301
13,004 84 13,088	14,763 14,763	15,100 15,100	15,048 15,048
	101	102	112
286	349	488	504
286	590	590	616

3 教科書

(1) 読書

中学校教則大綱の中では、学科の内容に関する規定は行なっていません。ですから、はたしてどういう程度のものを意図していたかは明らかではありません。しかし、各学校でそれぞれ制定した

ものはあります。ここでは、教則大綱に基づいて、明治15年(1882)5月、大阪中学校が制定した「各学科授業ノ要旨」から「和漢文」科中の読書に関するものを次にかかげてみます。(これについては、「大阪中学校一覧」に「中学教則大綱ノ頒布アリテヨリ、其正規ヲ踐ミテ之ヲ実地ニ施スハ蓋本校ヲ以テ其嚆矢トス」と述べています。かなり初めの例と見てよいものでしょう。)

和漢文 和文ハ本邦固有ノ文章ニシテ、其用極メテ広ク、漢文ハ普通ノ文材ニ資スル者ニシテ亦須要ノ科ナレバ、各級ニ通ジテ之ヲ課ス。今其学習ノ為メニ分チテ、読書、作文トス。

読書ノ要ハ読法ヲ正クシ、意義ヲ詳ニシ、兼ネテ作文ニ資スルニアリ。故ニ初等中学科ノ和漢文ハ誦読、議義等ノ法ヲ用キテ、文字ノ音訓、音声ノ抑揚、句読ノ断続ヲ明ニシ、字義、句意、章意ヲ解セシムルヲ旨トシ、殊ニ和文ハ先ヅ文字、言語、文章、音韻ノ諸論ヲ教ヘ、次ニ雅馴ノ文章ヲ授ケテ、其例格ヲ考究セシムベシ。

高等中学科ノ漢文ハ、更ニ教方ヲ高尚ニシ、委ク文章ノ賓主、照応、抑揚、頓挫等ノ諸法ヲ説キ、詳ニ文理ニ通曉セシメシコトヲ要ス。

この規定からうかがわれることは、読書はただ文章の意義を理解することだけでなく、同時に「作文ニ資スル」ものとして考えられていることです。そして、「漢文ハ普通ノ文材ニ資スル者ニシテ」とあることによっても、当時漢文調の文章のほうが普通と考えられていたことがわかります。

ところで、この大阪中学校の例でいいますと、和文が学習されるのは、初等中学一、二年と、高等中学二年だけです。それ以外は漢文が学習されていました。各学年で使用した教科書をあげると、以下のとおりです。下に線を引いてあるのが、和文(文法も)関係のものです。

初等1年 日本文典・小品文鈔^{しょう}

〃 2年 源平盛衰記・正文文章軌範

〃 3年 春秋左氏伝

〃 4年 謝選拾遺・春秋左氏伝

高等1年 唐宋八家文^{そう}

高等2年 唐宋八家文・古今集・三体詩

また、福井中学校では、和文としては初等中学1年のときに、あとで見る「本朝文範」を使用するだけです。このほか、当時の回想録などによっても、和文はそれほど重視されてはいません。当時の中学においては、漢文が主であり、和文は副であったと考えられます。

以上は男子の場合です。しかし、女子の場合はこれと逆でした。東京女子師範学校附属高等女学校が明治16年(1883)に制定した規則は、「読書」について、以下のよう述べています。

読書 読書を分て、和文、漢文とす。和文は^{わが}我国固有の文章にして其用殊^{その}に広く、漢文は普通の文材に資するものにして其用亦^{また}広きものなれば、共に之^{これ}を課すること多し。和文は近世の雅馴^{じゅん}の文体を授けて、中世の雅馴の文体に及ぼし、漢文は雅馴

の古文体を授く。和漢文を授くるには、読法を正しくし、意義を詳^{つまびらか}にし、兼て作文に資するを旨とし、誦読、講義等の法を用ひて、文字の音訓、句読の断続を明にし、字義、句意、章意を了解せしむ。又和文の意義を了解するの力を養はんが為に、文法を授け、文字、言語、文章の諸説を会得せしむ。

この規則は、上に見た大阪中学校の規則と、小学校教則綱領の読書についての規則とを参照して作ったのではないかと考えられますが、それにしても、和文のほうにかなり重みがかけてられています。大阪中学校の場合と同様に、各学年での使用教科書をあげると、以下のとおりです。(線を引いたのが和文のもの。)

下等1年 神皇正統記・近古史談・先哲叢談^{そう}

〃 2年 古今集・近世名家文粹

〃 3年 和文軌範・詞の玉の緒・詞の八衢^{ちまた}・近世名家文粹

上等4年 十六夜日記・正統文章軌範・大鏡

〃 5年 土佐日記・春秋左氏伝・竹取物語

以上のとおりです。和文のほうが主になっていることがわかります。それに、上級になると、抄本ではなしに、「土佐日記」や「竹取物語」を学習することになっています。

次に、当時の和文教科書について見ていきます。以下のような書です。これらによって、中学国語教科書の基礎的方向が定められたといえます。

稲垣千穎 ^{かい}	「本朝文範」	3巻	(明14・15)
松岡太愿 ^{たい}	「和文読本」	4巻	(明15)
稲垣千穎 ^{かい}			

里 見 義 「和 文 軌 範」 4 卷 (明15)

藤 田 維 正 「国 文 軌 範」 2 卷 (明16)
高 橋 富 兄

「国文」という名称は一書だけ用いていますが、「和漢文」科という科目名が示すように、この期はむしろ「和文」というほうが普通でした。（「国文」という考えであつかうようになるのは、明治20年代にはいり、上田万年博士「国文学」、芳賀矢一博士ら「国文学読本」などが、文学という観点から意義づけるようになってからです。そのころのものは、中学の読本なども、多く「国文読本」という名をつけています。それが「国語読本」という名に変わってくるのは、30年代になってからです。）維新直後のような神典・皇典という立場からではなく、わが国の作品から歴史・法制などに関するものを除いた一般を広く和文として扱っています。そして、いずれも、

初学の人の文かきならふに、依りよきふみ（本朝文範）

明暮漢字漢籍をのみさだしあへる人等の、いかでかうまくは書得べき。されば此の書、今の世の極めて初学の講学の為にとて物したるにて、（和文読本）

さて物まなびのなかにはまづ文かくわざぞ殊にいそしむべきものなる。（国文軌範）

のように、文章を書くうえに参考となるべきものだと主張しています。

「文範」や「軌範」という名称にしても、漢文にならっている、しかも文章を作るうえでの模範と考えていることは明らかで

す。（西尾実博士は「国語教材史」の中で、この期を「文範期」と呼んでおられます。）そして、その構成も漢文流の分類のしかたになっているものです。その分類、所載作品・作者名（2回以上）を以下にあげてあげてみます。

書名	分 類	所 載 作 品・作 者
本 朝 文 範	(上) 辞・序 (中) 日記・紀行・雑記・論・評 (下) 説・弁・教諭・訓誡・消 息	源氏物語 22 枕草子 4 栄花物語 2 大和物語 2 本居宣長 22 賀茂真淵 13 富士谷成章 6 村田春海 4 契沖 2 鵜殿よの子 2
和 文 読 本	(一) 歴代・儀式・軍旅 (二) 地理・動植・言行・才芸 (三) 武勇・遊戯・俳諧・羈旅・哀傷・伝 (四) 評・説・教訓・諫諍・勅書・院宣御請文・將軍家御教書・消息	徒然草 19 古今著聞集 16 太平記 12 源平盛衰記 11 十訓抄 10 平家物語 5 宇治拾遺 3 東鑑 3 今昔物語・保元物語・大鏡・神皇正統記・建武年中行事・公事根源各 2 本居宣長 14
国 文 軌 範	(上) 序・記・記事・論説 (下) 書牘・賛銘・伝・碑書後題・跋・祭文・雑	本居宣長 14 村田春海 10 賀茂真淵 7 藤井高尚 7 伴蒿蹊 6 竹村茂雄 4 秋山光彪 3 富士谷成章 2

平安朝以後のいろいろな作品が採られていますが、どれにも共通しているのは国学者たちの雅文です。これはやはり書くことに重点を置いているからでしょう。しかも、平安朝の各作品にしても、文学性自体が問題になっているよりは、その分類に属する文章の範例という意味のほうが主です。たとえば、「源氏物語」から採られているものにしても、帝から桐壺の更衣への御文、源氏

の紫上への訓誡^{かい}、朱雀院^{すざく}から女三の宮への御文といったものです。——ただし、「和文読本」は「古今著聞集」「十訓抄」から多く採っています。これは、この後25年ごろから30年代の初めにかけて、中学教科書に多く逸話・物語が採用されるということの先駆をなしているものです。

以下、採用されている一、二の文例を示します。（あとに見るように、係り結びが指摘されていたり、語句が補われていたりしているのですが、それらは省略します。）

神無月のころ、山里より、散りたる紅葉の枝につけて

鵜殿よの子

かゝるかくれがをもらさぬ立田姫のこゝろばへを、やみのにしきとはなしはてずもがな、とまちわたりつるほどは、時雨ふる日も、ながくのみおぼえつれど、なぐさむかたも侍りしを、今は、かくいたづらに散すぎたる梢を見るに、このゝちは、まして道もなくこそ、と心ぼそさも、さびしさも、いはんかたなくながめ侍り、またれつる、人のこゝろも、紅葉も、うつろふ色を、見はてつるかな（本朝文範・下）

烏羽僧正の絵のこと 古今著聞集

たちばな
橘 成 季

烏羽僧正は、近き世にはならびなき絵かきなり、中略
どの事にか、供米の不法のことありける時、絵にかゝれける、
辻^{つじ}風のふきたるに、米の俵を多くふきあげたるが、ちりはひの
こと
如くに空にあがるを、大童子、法師ばらはしりよりとぶめんと

したるを、さまざまにおもしろう筆をふるひてかゝれけるを、
^{たれ}誰かしたりけん、其の絵を院御らんじて、御入興ありけり、そ
のころを僧正に御たづねありければ、あまりに供米不法に候
ひて、実のものは入り候はで糟糠^{ヌカ}のみ入りて軽く候ふほどに、
辻風に吹き上げられ候ふを、さりとてはとて、小法師ばらが取
りとぶめんとし候ふが、をかしく候ふを、書いて候ふ、と申さ
れければ、比興の事なりとて、それより供米のさたきびしくな
りて、不法のことなかりけり、（和文読本・卷三）

ところで、小学校の読本のところで一部ふれましたが、これら
の教科書には、周到な注釈がほどこされている点で、以後の20年
代のものとたいへん違っています。中でも「本朝文範」が最も詳
しいのですが、頭注をほどこし、文中に適当な訳語を補い、かな
の左傍に漢字をしるし、係り結びを指摘し、大段落や小段落の符
号をつけるなどしています。どこにも原文をたやすく読ませるた
めの努力が払われているのです。これはおそらく稲垣千顥^{かい}が始め
たものでしょう。かれは、この方法について、萩原広道の「源氏
物語評釈」にならったと述べています。（しかし、この方法は、の
ちに落合直文「^{中等}教育 国文軌範（明25）」で、「この書にさることせ
ざりしは、そはすべて教師にゆづるべきものにして、著者のすべ
きことにあらずとおもひてなり。」と批判されて以来、行なわれ
なくなりました。もっとも、最近では大村 浜氏によって、古典
学習の場合、同様の方法が採られています。やはり広道の「評釈」
からヒントを得られたのだそうです。）次にその簡単な例を示し

ておきます。漢字は上に書きましたが、原文では左傍にあります。また、□の印は→に変えました。上欄には「菟原」と「血^ぬ淳」の注があります。|は段落のしるしです。

をとめ塚の故事 大和物語

昔、津の国にむすめ^{処女}ありけり、それをよばふ男ふたりなんありける、1人は、その国にすむ男^{ニテ姓}、うちはむばらになんありける、いまひとり^{一人}は、和泉国の人になむありける、うちは、ちぬ^{姓 血^ぬ淳}となんいひける | (本朝文範 中——ただし、この文は同年10月の改正版では除かれています。)

以上、和文の教科書について見てきました。次に漢文の教科書についてですが、これは江戸期にも使用された著作がそのまま用いられるということが多かったようです。上に見た大阪中学校・東京女子師範附属高女の例でも、わかるように、「文章軌範」「春秋左氏伝」「唐宋八家文」などがそのまま使用されていました。しかも、「読書」科においてだけではありません。別に「修身」でも「孝経」「小学」「論語」等、「歴史」でも「皇朝史略」「十八史略」等（これは大阪中学だけ）が使用されています。法制など専門的なものは除かれています。幕末に昌平^{こう}黌^{へい}その他で読まれていたもの（慶応4年「学問所修業次第」による）と、それほどの変わりはありません。ただ、分化した各教科において、それらの書物を読むようになっているだけです。

〔回想録から〕

では、当時の実際の状態はどのようなものでしょうか。終戦

当時の首相だった鈴木貫太郎は、明治14年（1881）群馬中学校へ入学したのですが、「鈴木貫太郎自伝」でそのころのことについて、以下のとおり述べています。

漢学の先生からは日本外史、政記などを教はつた。これはすらすらと読めるので、面白いところは^{あん}誦する位まで節をつけよく朗吟したのだつた。日本外史の力は大い。国体の思想はこれで作られた。

この頃は本を^{ただ}只無茶に読むことを奨励したもので、私なども、小学校で十八史略を読んでゐた。学校で教はる、家へ帰つてまたそこを読む、果ては毎日一冊宛^{すつ}読み切るといふ、今から考へると全く乱暴な話だが、その頃はとんと気もつかずにゐたのであるが、後で考へてみるとよくやつたと思つてゐる。あの努力が、十四五歳の私に、もう今の中学四五年生位を完全にやり上げさせてゐた。中学校で国語は僅か習つたが、これは文法をやる位なもので、先生は林^{みかおみ}甕臣といふ偉い歌よみの国学者だつた。これはテニヲハの使ひ方をいくらか教はつただけで、生徒もさう重きをおいて聞いてゐなかつたやうである。

これによつても、今まで見てきたとおり、漢文のほうが重んじられていて、和文のほうはそれほどでもなかったようすがわかります。大阪中学校の例では、1年のとき文法をやり、中根淑の「日本文典」を使用していました。この文章でも、国語のうち主として行なわれたのは文法であつたと述べています。

当時、漢文が正統の学問であつたという同じような回顧を、わ

たしたちは、芳賀矢一博士の文章の中にも見ることができます。
いうまでもないことですが、芳賀博士は明治の後半から大正にか
けて東大国文科教授であり、国定教科書の編集にもあたった人で
す。芳賀博士は明治13年（1880）、仙台の宮城中学校に入学し、
同16年（1883）に初等中学科第5級を卒業したのですが、「私の中
学生時代」（「芳賀矢一文集」所収）の中で、当時の授業について、

国文などといふものはもとより無い。読本も無ければ、文法
も無い。仮名遣などは先生も無茶苦茶、生徒も無茶苦茶、唯漢
文ばかりである。修身として論語、孟子を習ひ、漢文兼歴史と
して通鑑^{らん}肇要を課せられた。ずんずん読んで行くので、あの通
鑑肇要を一学年の中に大抵終まで読んでしまつた。何をいつて
も漢文が重要な学科で自分等も一番面白いとおもつた。^{しか}併しそ
の時分から考へると、今日は国文の読本も出来、文法も教授さ
れるといふ風になつて、誠に進歩したものである。

と述べています。今まで見てきたとおり、規則でも和文について
の授業はもちろん定められてはいました。しかし、実際にはこの
ように、あまり行なわれなかったところもありました。

ここに述べられているところから見ますと、とにかく当時は漢
文が主で、しかも「重要な学科」だとされていたことがわかりま
す。芳賀博士も、学校で学習するだけではなく、帰宅後は漢学塾
へ通って勉強していました。

総じて仙台の地方（ばかりにも限るまいが）は、漢学がまだ
まだなかなか^{さかん}盛で、学生は帰宅後必ず漢学先生の塾^{かよ}へ通つて勉

強して居つた。同級生の中にも漢文を作つたり、漢詩を作つたりして居るから、^{うらやま}羨しくてたまらない。それで私も親に願つて、其の頃名高かつた国分先生の許へ行つて、分りもせぬのに左伝の講義などを聴いた。先生の御座敷はいつも一杯で、聴講者が部屋の外まで^{あふ}溢れて居た。それから又佐久間晴岳といふ先生（これは有名な洞巖先生の^{のち}後で画家兼儒者）の許へ通つて、作詩を少々学んだ。もともと漢学の力が無いのだから、どうせ^{ろく}碌なもの出来ない。詩語粹金、幼学便覧などもひねくつて、始めて平仄^{そく}とか韻とかいふものを覚えた。今日から考へると、此の時分に学んだ漢学が私の為には余程役に立つて居る。総じて此の時代には、学校の学科が今のよりは余程楽であつたやうである。家へ帰つて後も、あまり学校の課目を勉強しないで、外の事をして居たやうである。そこで友達同士寄合つて詩を作つたり、文を作つたりして批評し合ふ。又輪読会を開くといふやうなことが絶えず行はれた。

当時は、中学へ進まなくても、漢学塾へは通うという風潮でした。若槻^{つぎ}礼次郎は明治11年（1878）に松江市の^{さい}雑賀南小学校を卒業したのですが、

小学校を出ると、私は中学を志願しないで、漢学塾へ通つた。塾長は内村友輔といって、元の藩校の先生で、神田の昌平校で、重野^{やすつぐ}安繹さんと一緒にやっておったという、相当な漢学者であつた。なぜ中学へ行かなかつたか。それは年上の兄の意見であつたと思う。

と、「古風庵回顧録」の中で述べています。佐佐木信綱博士の「作歌八十二年」にも、漢学塾へ通っておられたときのことがしるされています。

(2) 作 文

作文についても、読書の場合と同じく、大阪中学校の「各学科授業ノ要旨」に定めているところから見ていきます。それには、以下のようにあります。

作文ノ要ハ思想ヲ表彰シ、事実ヲ記述スルニ在リ。^{すなわ}乃チ初等中学科ノ仮名交リ文、書牘^{とく}文ハ近世ノ雅馴^{じゆん}ノ文体ニ倣ヒテ之ヲ作ラシメ、漢文ハ古雅ノ文体ニ倣ヒテ単簡ノ記事文ヲ作ラシムベシ。高等中学科ノ和文ハ中世ノ雅馴ノ文体ニ倣ヒテ之ヲ作ラシメ、漢文ハ記事文ヨリ論説文ニ及ボシ、詩及歌ハ先ヅ古人ノ詩歌ヲ記誦^{しやう}セシメ、^{やや}稍句調ニ熟シ格律ヲ曉ルノ後、歌ヲ詠ジ詩ヲ賦セシムベシ。凡和漢文ヲ作ラシムルニハ、文章簡明、句調^{ちやう}暢和、^{かつ}且着実ニシテ例格ニ合スルヲ旨トシ、其文題ハ務メテ実用ニ適スル者ヲ選^{ただし}ブベシ。但詩歌ハ韻調正雅ニシテ、趣味優美ナランコトヲ要ス。

ここでは、和文・漢文の文章を作るばかりではなく、和歌・漢詩を作ることも要求されています。和文の教科書が、文章を作るためという目標をかかげていることについては、上に見てきました。この規定は、それに応じているものです。なお、「古今集」も歌をよむための参考として学習されたものであることが察せら

れます。

しかし、やはり漢文にならった文章を作ることのほうが、おそらく主だったのでしょう。前にあげた教科書の例でいいますと、「小品文鈔」^{しょう}「文章軌範」「唐宋八家文」が文章を作るための、「三体詩」が詩を作るための参考として使用されていたと思われます。

女子のほうは、しかし、和文のほうが重視されています。前に見た東京女子師範附属高女の規則は、以下のとおりです。

作文 作文は思想を表示し、事実を記述する者にして、其用^{その}亦^{また}広きに由り、各学級通して之^{これ}を課す。即下等科に於ては、先^{すなわち}づ普通の女用消息文及願届等、公用文類を作らしめ、次に近世の文体に倣て雅言消息文及雅言叙事文を作らしめ、兼て和歌を学ばしむ。文題は実用に適するを旨とし、構文は簡明着実にし^ひて鄙俗ならず、雅言文、和歌の如^{ごと}きは、趣味優美なるを尚^{たつと}ぶ。

ここには漢文はあげられていません。そして、まず手紙文とか、願い・届けから始まって、雅文の手紙や叙事文に進むように定められています。

作文における男子・女子の違いは、以上のようなようです。次に教科書についてですが、和文の場合は、読書の項で見た教科書がやはり作文のためにも用いられることになっていました。なお、女子では、このほか江戸期の往来物の形式を受けついでいる手紙の範文集なども用いられていました。

ですから、漢文では、上にも見たように、「文章軌範」「唐宋八家文」など、まさに正式の漢文の文範集が使用されていました

が、しかし、それに合わせて、

土 屋 栄 「小 品 文 鈔」 3 卷 (明10)

小 川 棟 宇 「^{とう う}明治^{しょう}近世名家文抄」 6 卷 (明11)
^{新撰}

東 条 永 胤 「近世名家文粹」 3 卷

のようなものも用いられていました。これらは幕末から明治にかけての人々の文章も収録しているものです。「^{明治}近世名家文抄」
^{新撰}から一例をあげます。

贈前原一誠書 三 浦 梧 楼

前原一誠足下。不_二相見_一六七年。忽有_二今日之事_一。得_二足下書_一。足下嘗_二擧_一重職_二辱_一顯位_一。雖_レ退_二臥草野_一。廟議所_レ不_レ合。宜_二極言論陳_一。何有_レ所_レ嫌。而甘為_二叛乱賊_一乎。率_二無賴兇徒_一。流_二毒州郡_一。生靈何罪。所_レ過慘虐放火為_レ盜。国憲所_レ不_レ赦。僕奉_二鎮台司令之命_一。來督_二軍士_一。地方鎮台之備。方為_レ誅_下兇徒如_二足下_一者_上耳。僕將_下不日指_二揮陸軍_一。操_二旗鼓_一相以答_上。

〔當時の回想と生徒の作文〕

しかし、これらのほか、小学校のところで見たような記事文・論説文の文範集も、生徒の間では用いられていました。そして「^{えい}穎才新誌」などの投稿雑誌が、やはり中学生たちにも愛読されていました。その例を、わたしたちは、前にも見た芳賀矢一博士の文章に見ることができます。

此の頃の作文の模範として喜んで読んだのは穎才新誌や小学教文雑誌などであつて、これ等は毎号待^{まち}兼ねて読んだ。外に中

学生を見るやうな雑誌類は何も無い。これは今日の有様と比べれば大変な相違である。学校で作つた文章は例の「一瓢^{びよう}を携へて杖を曳く」といふ体裁で、最後は「日西山^{うすず}に春く」とか「暮^ぼ靄蒼然として来る^{きた}」とかで収めたもの。「陶然として酔ふ」とか、「玉山已^{すで}に頽^{くす}る」とか平気で書いて居たものである。……

学校から帰ると、三国志だの、八犬伝だのすきな本を読んで遊び、^{また}又例の近処の友だちと詩や文を作つて遊んだ。友だちの一人で頻りに小学教文雑誌へ投書する人がある。其の人が或時^{ある}私ども二三人の詩や文を書いて投書した。それが掲載されたので、私どもはこれは必ず例の某君のしたことに相違ないと、其処へ押しかけて行つて、絶交しようなどと騒いだ事もあつた。

ここに「玉山已^{くす}に頽る」という句があげられていますが、前に小学校のところで見た範文の中に、同じく「頽然トシテ玉山ノ倒ル」とあったことが思いだされます。当時、こういう語や句をつぎ合わせて文章を作っていたことが察せられます。

前に滑川道夫氏が引かれたものですが、次に「穎才新誌・326号」に載せられている文章をあげておきます。作者の大町芳衛は、のちの大町桂月で、14才のときの作です。

記 神 保 街 回 禄

皇都每街市鐘ヲ置キ、火災アレバ^{すなわちたたき} 則^{もつ} 敲^{これ}テ以テ之ヲ報ズ。区内三撞^{どう}、区外二撞、最遠ナル者一撞。最近ナル者敲^(ママ)キ断ヘズト云フ。今茲三月四日黎明^{れい}、眠醒ムレバ則市鐘欽々敲^{はじめ}キ断ヘズ。始テ近街火ヲ失スルヲ知リ、蹶^{けつ}起屋上ニ登リ、之ヲ見レバ、黒烟

続々西北数丁ノ処ニ起ル。^{すなわ}乃チ門ヲ出^{いで}テ奔往^{すで}既ニ達スレバ、則チ神保街ナリ。觀ル者群集、殆^{ほと}ソド立錐^{すい}ノ地ナシ。焰悠々遠ク天ニ昇リ風之レニ触ルレバ愈^{いよいよ}激シ、恰^{あたか}モ紅竜九天ニ昇ルガ如^{ごと}ク、或^{あるい}ハ変ジテ真黒トナリ、或^{あるい}ハ淡墨トナリ、忽チ真紅、忽チ淡紅、紫紅ニ化シ、青黒ニ変ジ、千變万化。而シテ消防夫一隊、奮勇^{とび}鳶口ヲ携ヘ、烟焰ノ中ニ入り、家屋ヲ毀チ、以テ火焰ノ他ニ移ルヲ防ギ、一隊ハ竜筒水ヲ以テ水ヲ注ギ、以テ火焰ヲ消ス。其ノ勇壯ノ状亦觀ルベキナリ。又火ヲ避クル者ヲ見ルニ、或^{あるい}ハ負荷シテ奔ル者アリ、或^{あるい}ハ老人杖ニ援ケラレテ漸ク走ル者アリ、屋上ニアリテ哀ヲ乞フ者アリ、母子相泣テ行ク者アリ。千態万状、其ノ周章ノ態、實ニ悩ムベキナリ。余於是乎、^{ここにおいてか}聊カ感ズル所アリ。古人曰、小事ヲ忽^{いわく}ニスレバ即大事ヲ誤^{ゆるがせ}ルト。夫レ回祿ノ原ヤ、微々一火点ノミ。而シテ能ク生靈ヲ殺傷シ、数百千ノ家屋ヲ焼夷スルニ至ル。小事ノ忽ニスベカラザル如此。若シ夫レ国家ニシテ小事ヲ忽ニセンカ、能ク治平ヲ保ツ者、未ダ之レアラザルナリ。豈^{あに}戒メザル^{べけ}可ンヤ。火災^や歇ミ、群人散ジ、石橋ノ上ニ佇立^{ちよ}シ、觀望之ヲ久フシテ去ル。

(3) 文 法

特に教科としてあげられているわけではありませんが、ここで文法についてもふれておきます。それは、学制に示されていたような文法の授業は、むしろこの期のころから中学のほうへ移ったと考えられるからです。

すなわち、小学校では、読本などの中に部分的に示されることはあっても、規則の上には別に定めるところはありません。ところが、これに対して、大阪中学校の規則では、初等中学の1年のとき、中根淑「日本文典」を使用することになっています。（この書については、前に学制期のところで見ました。）いっぽう、女子師範附属高女の規則でも、本居宣長「詞の玉の緒」・本居春庭「詞の八衢^{ちまた}」を使用することになっています。さらに、後のことになりますが、明治19年（1886）に文部省が師範学校で採用すべき図書を示したもののの中には、

文部省編輯寮^{しゅう} 語彙別記^い 文部省編輯寮 語彙活語指掌

本居春庭 詞の八衢 本居宣長 詞の玉の緒

中根淑 日本文典 物集^も高見^{すめ} 初学日本文典

があります。これらの点から考えますと、文法はだいたい中学・師範などで行なわれることになったと判断できるのです。

学制期の文法教科書が書くためのものとしてあったことは、前に見ましたが、この期になると、「作文＝資スル」という点ももちろん認めますが、和文を読むためのものという考えが現われてきています。「殊＝和文ハ先^まヅ文字、言語、文章、音韻ノ諸論ヲ教へ、次＝雅馴^{じゆん}ノ文章ヲ授^そケテ其例格ヲ考究セシムベシ」、あるいは「和文の意義を了解するの力を養はんが為に、文法を授け、文字、言語、文章の諸説を会得せしむ」と定められているのです。

この期に著わされた文法書には、少し前のものからあげます

と、

- | | | | | | | |
|----|---|----|---|----------------|----|----------|
| 物 | 集 | 高 | 見 | 「初学日本文典」 | 2巻 | (明11) |
| ○佐 | 藤 | 誠 | 実 | 「語学指南」 | 4巻 | (明12) |
| ○関 | | 治 | 彦 | 「語格
階梯日本文法」 | 2巻 | (明12) |
| ○大 | 槻 | 修 | 二 | 「小学日本文典」 | 2巻 | (明15) |
| 阿 | 保 | 友一 | 郎 | 「日本文法」 | 3巻 | (明15・16) |
| 権 | 田 | 直 | 助 | 「語学自在」 | 2巻 | (明18) |

などがあります。このうち、最後の「語学自在」は、幕末から明治にかけての国学者権田直助の著作になるもので、明治4、5年ごろにはすでにできていたと考えられるものです。語を体言・用言・体辞・用辞に分類しているものです。「体」は活用しないもの、「用」は活用するものです。体辞は今の助詞、用辞は今の助動詞にあたります。）

そのほかのもので、江戸期の国学者たちの分類にだいたい従っているのは、初めに○をつけてあるものです。このうち、大槻修二「小学日本文典」は、語を名詞・動詞（今の形容詞も含む）・装詞（今の副詞・連体詞その他）・テニヲハの4種に分けています。江戸期の国学者富士谷成章^{なりあきら}の分類のしかたにならったものと思われます。佐藤誠実「語学指南」・関治彦「語格階梯日本文法」は、江戸期末に一般に行なわれていた言（体言その他）・詞（動詞・形容詞）・辞（助詞・助動詞）という3分類を行なっているものです。

これに対し、阿保友一郎「日本文法」は、西洋文典流の分け方

をしています。しかし、名詞・動詞・形容詞・副詞・後置辞（助詞）・形状辞（形容詞の補助活用など）・助動辞・接続辞・感歎辞という分類のしかたです。1 詞と辞を区別していること。2 辞のなかへ接続辞と感歎辞を含めていること。（これは時枝誠記博士の分け方と似ています。ただし、ここでいう接続辞はバ・テなど今の接続助詞で、その点違います。）3 形状辞というのを認める。以上の点に特色があります。

物集高見「初学日本文典」は、言・詞・辞という3分類をして、それぞれの分類の中には西洋文典流の概念を取り入れて語を扱っているものです。

前に、学制期のところで、特に品詞論について、西洋文典の考え方がはいつてきたため、それ以前の国学者たちの考え方との間に混乱が生じてきたことを見ました。この時期も、混乱はやはり同様でした。いろいろな意見が提出されていることは、以上簡単にながめてきたことによっても察することができます。これが一応調和統一されるに至るのは、20年代にはいつて大槻文彦博士の「諸法指南」「広日本文典」が出現してからのことです。

ですから、学校教育のうえにも、このような事情は当然反映しています。洋風の文典が、ある学校で使われているかと思うと、「詞の玉の緒」「詞の八衢」が、ある学校では使われているという実情です。そして、文部省も師範学校の教科書として、それらのどちらもあげています。読書や作文に資するためとはいっても、活用語の用法以外は、どこまでその効果をあげることができ

たか、疑問に思います。'

〔回想録から〕

しかもまた、実際の授業がどの程度まで行なわれたか、その点も疑わしい点があります。東京文理科大学教授で、文部省にも関係され、一生国語問題解決につくされた保科孝一氏は「国語問題五十年」で、次のとおり述べておられます。これは高等中学での例ですが、これから見ると、初等中学で文法はされていないようです。

わたくしが第一高等中学校に入学したのは明治二十二年であったが、その時から国語の文法が学科に加えられた。小中村義象・落合直文の両先生がこれを受け持たれ、わたくしの学級は落合先生の担任であった。学生は日本語にも法則があるのかとめずらしく感じ、いままでは文法は、英語にはあるが日本語にはないものと思っていたのだから、日本語にもやはり文法があることを知って、いくぶんのほこりをさえ持つようになった。落合先生が動詞の活用を、なんのよどみもなくスラスラといわれるので、われわれは非常に驚嘆し、一つ先生をいじめてみようじゃないかと、数名の生徒が相談し、こんな動詞なら、さすがの先生も困るだろうと、文法の時間に突然質問をはじめた。

「先生！『^{ほころ}綻ぶ』という動詞はどう活用しますか」ときくと、先生はすこしも驚かず、それは「バ行上二段だ」「それではどう活用しますか」「ウン、綻ビビブルブレビとはたらくんだ」

「それでは木を植えるという動詞はどう活用しますか」「それ

はワ行下二段で植エエウウルウレエとはたらくんだ」と答えられ、すこしも困られる様子がない。学生はますます驚嘆の度を増し、先生は文法の神様だと尊敬し、小中村・落合両先生の人望は非常なものであった。

(4) 習 字

習字も、大阪中学校の例について、見ていきます。

習字 習字ハ筆力^{しゅうけい}適勁ニシテ、字形正雅ナルヲ要ス。故ニ先^{ゆえ}ヅ姿勢執筆ノ法ヲ授ケ、漸ク間架結構ヲ練習セシメ、稍^{やや}熟スルノ後ハ、時ニ細字ヲ速写セシメ、以テ日常ノ応用ニ慣^{もつ}レシムベシ。

このように規定しています。使用している教科書は1年が楷書^{かい}の「楽志論」、2年が行書の「陳情表」と草書の「前出師表」^{すい}です。いずれも村田海石書で、同校編のものです。日常の用という点は、それほど重んじられてもいないようです。

しかし、女子の場合は、そうではありません。中学すなわち男子では初等中学1・2年に行なわれるだけですが、東京女子師範附属高女では、下等科から上等科の5年間を通じて、毎週2時間ずつ行なうことになっています。

習字 習字を授くるには、下等科に於ては、平仮名及楷書、行書、草書の中字より、漸次細字を習はしめ、上等科に於ては、楷書の細字及平仮名、行書、草書の連書、消息、色紙、短冊等の書方を習はしむ。

このように定めています。ここでは、日常の用から始まって、消息・色紙・短冊の類にまで及ぶことになっています。特にかなが練習されることは、男子とは違います。使用している教科書は、小原燕子「明治女用文」・「千字文」・阿仏尼「乳母の文」・「古今集漢文序」・曾大家「女誠」・「古今集」で、これらのすべては、後に同校教員になった植村花亭の書になるものです。大阪中学校の場合もそうでしたが、習字の教科書では、このようにその学校の編になったり、その教員が書いたりしたものが、多かったことだろうと考えられます。

ここでは、読書・作文の場合と同じく、男子と女子とでは、重点の置き方が違ってきます。男子のほうでは、時間数も少なく、まずひととおりやっておくといったぐらいの感じですが、女子のほうになると、各学年を通じて習字の時間があり、日常の用が足せるばかりでなく、教養といった意味あいのものまで含まれているのです。読書・作文において、男子では漢文のほう为重んじられ、女子では和文のほう为重んじられたという事情に応じる点があります。

編 者 注

引用文は原則として原文のままとしましたが、漢字にはふりがなをつけました。その場合、特に注記しないかぎり、原文のふりがなはかたかたで残し、編者の加えたふりがなはひらがなで示した。

国語シリーズ No.50

続・教科書から見た

明治初期の言語・文字の教育



MEJ 4153

昭和37年3月10日 印 刷
昭和37年3月15日 発 行

著作権所有 文 部 省

東京都千代田区神田小川町1の1
発 行 者 光 風 出 版 株 式 会 社
代表者 青 木 参 平

名古屋市昭和区白金町2の8
印 刷 者 竹 田 印 刷 株 式 会 社
代表者 竹 田 光 二

東京都千代田区神田小川町1の1
発 行 所 光 風 出 版 株 式 会 社
電話 丸の内(231)2880番
振替口座 東京162599番

定価 64円